

集団的記憶研究の素地

齊藤 公輔

集団的記憶 (kollektives Gedächtnis) 研究は、さまざまな社会的問題や文化的シンボルシステムに関連した異なる複数の学問分野にわたって取り上げられている、文化科学領域の研究対象のひとつである。¹最近の社会的文化的背景に後押しされているということもあり、近年では重要な研究のひとつに数えることができるだろう。その背景とは、ドイツを例に挙げれば、ホロコースト及び第二次世界大戦を経験した世代が減少してきていることである。この問題は、日本にも同じように当てはまるのが容易に想像できるだろう。また、アメリカにおいてはベトナム戦争の記憶、9.11の記憶などについても議論されている。しかし、このような問題をよく考えてみると、ある特定の国にとどまらないインターナショナルもしくはトランスナショナルな問題と捉えることができるのではないだろうか。たとえばドイツの事例については、ドイツ国内のみならず少なくともヨーロッパを視野に入れなくてはナチスやホロコーストといった問題を扱うことができないだろう。また日本の問題は、すぐに中国や韓国を中心とした東アジアの問題として考える必要があるだろう。まして9.11については、文字通り世界の問題といえるだろう。

このような背景を受けて、集団的記憶研究がひとつのブームになっている。²ドイツ国内をみると、ギーセン大学において「想起文化」研究プロジェクトがDFG (Deutsche Forschungsgemeinschaft) の特別研究434号 (Sonderforschungsbereich434) に指定され、精力的に活動が展開されている。³また日本でも、例えば一橋大学において海外から研究者

1 Vgl. Erll (2005), S. 1.

2 Vgl. Erll (2005), S. 1.

3 Vgl. http://www.dfg.de/forschungsfoerderung/koordinierte_programme/sonderforschungsbereiche/liste/sfb_detail_434.html

を招いて研究会などを開催し、最近その研究成果が一冊の本にまとめられている。⁴

従来、記憶研究は個人に限定されたものが多かった。記憶研究自体はアリストテレスにまで遡り、その意味で2000年以上の歴史とそれに伴う膨大な研究量を我々はもっている。⁵ また、特に1885年のエビングハウス（Ebbinghaus）に始まる科学的記憶研究は、その後100年が過ぎる間に様々な理論的変遷や実験がなされ、心理学のみならず医学や生理学、工学など他分野からの研究成果も取り入れ、いっそう充実してきているといえるだろう。⁶

もっとも、これらの研究の大部分は人間の記憶に関する研究に限定的である。記憶研究者が最も多く集まるとされるサイノミック・ソサイアティ（Psychonomic Society）の1985年第26回年次大会において、エビングハウスから100年間の研究成果に関する調査があり、「発見・事実」「理論・モデル・概念」「方法・技法」の3部門について、それぞれ主要な研究成果を提示してもらうという方法で行われた。ここで「理論・モデル・概念」に注目してみると、提示された研究成果の上位10位のうち、そのすべてが個人の記憶に関する研究成果であった。⁷ 太田は著書『記憶研究の最前線』（2000年）のなかで今後の記憶研究の方向性を予測しているが、それは次のとおりである。すなわち、これまでの研究が引き続き行われるなかで、将来的には人間の本質研究と現実社会の問題（例えば高齢社会を迎えるなかで、加齢による記憶低下を防ぐにはどうしたらいいか、など）の二極化が進むと分析しており⁸、したがって今後の記憶研究は引き続き人間個体を中心としたものが主流をなすと考えられるだろう。

また近年では、心理学研究の分野において従来のアプローチではない別の視点からの記憶研究が最近の社会背景を伴って活発に行われるよう

4 森本敏己編（2006年）：『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』、旬報社。

5 太田／多鹿編著（2000年）、i ページ。

6 太田／多鹿編著（2000年）、ii ページ。

7 太田／多鹿編著（2000年）、4 ページ参照。

8 太田／多鹿編著（2000年）、9 ページ。

になってきている。そのひとつが「記憶を個人の精神活動としてだけで考えるのではなく、個人を取り巻く状況、社会、文化、時代背景との関連を含めて、広く記憶に関する問題をとらえ直そう」⁹ というものであり、文化心理学とよばれている。しかし、ここで問題にされる記憶は依然として個人の記憶に限定的であり、個人と社会的文脈のなかで記憶がどのような関係にあるのか、を中心に展開されているようである。¹⁰

このように、記憶に関する研究は特に心理学の分野において活発であり、その研究対象は個人の記憶とするものが圧倒的であった。一方、心理学とは別の分野でも様々なレベルの必要性に迫られて、社会的文化的に記憶を研究する動きがある。その必要性とは、一例を挙げるならば第2次世界大戦の記憶をどう保存するか、といった戦争に関する問題のことである。そのような文脈のなかで展開される文学や文化学領域の記憶研究に関心が寄せられている。特に、ヤン・アスマン (Jan Assmann) の研究がドイツ語圏における集団的記憶研究の代表例としてあげられるだろう。アスマンは主著『文化的記憶』 („*Das kollektive Gedächtnis*“) の中で、

一般に記憶は、さしあたって純粹に [人間の] 内的現象として考えられ、個人の脳のなかに位置づけられている。つまり、大脳生理学、神経学、心理学の主題としてとらえられているのであって、歴史的文化科学の主題としては理解されていない。しかし、何がこの記憶を内実のあるものとし、いかにその内容を組織し、また、何をいかに長く保持しうるのかということは、内的な能力や制御能力の問題ではない。むしろ外的な、社会的、文化的枠組み条件の問題である。¹¹

と述べており、その意味で記憶を文化現象として扱っている。

9 金児／結城編 (2005年)、8ページ。

10 金児／結城編 (2005年)、18ページ。

11 Assmann (1992=2005), S. 19f. (邦訳：岩崎稔 (1998年)、20ページ。)

ここで、アスマンの文化的記憶概念およびこれから以下で展開する集団的記憶概念について次の点を確認する必要があるだろう。すなわち、集団的記憶は個人の記憶ではなく、あくまで集団の記憶である、という点である。ここに、これまで紹介してきた記憶研究と集団的記憶研究との決定的な違いがみられるだろう。岩崎の言葉を引用するならば、「あくまでもそこで問題になるのは、集合的記憶の問題であって、記憶術のように個体における記憶の陶冶の問題ではない」¹²といえる。

以上、記憶研究に関するこれまでの流れを、集団的記憶研究への関心に引き寄せて概観してきた。これまでの記憶研究は、人間個体に関するものが中心であった。しかしそれとは別の社会的文脈から、個体ではなく集団の記憶を研究する動きが出てきている。それが集団的記憶に関する研究である。この集団的記憶研究は、様々なレベルの必要性、すなわち社会的、文化的および歴史的な必要性に迫られて誕生したという背景があることを先に述べた。森本敏己は記憶研究が受け入れられた背景として、フランスの記憶研究者ピエール・ノラ (Pierr Nora) の影響との関係を挙げながら、「国家国民論」と「戦争の記憶」に関する研究がすでに盛んであったことを挙げている。¹³しかし、集団的記憶研究の流れは、この二つだけが源流ではなさそうである。集団的記憶研究がなぜ注目されているのかを、さまざまな視点から具体的に検証し集団的記憶研究の素地を確認することが、本稿の目的である。ここではアーストリッド・エアル (Astrid Erll) にならい、1) 社会的背景 2) 学際的背景 3) メディア、という観点についてドイツとの関係に注目しながら説明していきたい。¹⁴

なお、本稿では „kollektives Gedächtnis“ を「集団的記憶」とすることをはじめに断っておく。「集合的記憶」を当てる場合もあるが、その概念はモーリス・アルプヴァックス (Maurice Halbwachs) の記憶概念の訳語として定着している印象があり、したがって傘概念として用いるのは適切ではないと判断した。本稿において「集団的記憶」は、エアルの

12 岩崎稔 (1998年)、20ページ。

13 森本編 (2006年)、21ページ。

14 Vgl. Erll (2005), S. 3 f.

著作に出てくる „kollektives Gedächtnis“ の訳語および一般的傘概念として使用されている。

1) 社会的背景

エアルは集団的記憶研究の社会的背景として、大戦の記憶のありかたおよび冷戦の終結とそれに伴う民族問題をあげている。¹⁵ ここでは、これらを詳しく見ていきたい。

導入部分で示したとおり第2次世界大戦の体験世代が減少していることが、歴史と記憶のあり方をめぐる議論に密接に結びついている。過去の記述には「学問的歴史調査」(die wissenschaftlich-historische Forschung)と「メディアに支えられた『文化的記憶』」(das mediengeschützte >kulturelle Gedächtnis<)という、ふたつの形態があるといわれているが¹⁶、この二つをどう取り扱うかが問題となる。

テッサ・モーリス・スズキ (Tessa Morris - Suzuki) は、著書『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』 („*The Past Within Us: media/memory/history*“) の中で、上述した二つの歴史概念に対応すると思われる「解釈としての歴史」と「一体化の歴史」という二つの歴史概念を用いることによって、この問題の所在を明らかにしようと努めている。

[歴史が持つふたつの側面のうち] 一方の視点から見れば、歴史の研究とは解釈の研究であり、さまざまな出来事のあいだの因果関係、思想や制度の系譜、人間社会に変化をもたらす力を理解するための知識の探求でもある。しかし別の見方からすれば、歴史は“アイデンティフィケーション一体化”の問題でもある。わたしたちと過去との関係は、原因や結果についての事実の知識や知的理解だけではなく、想像力や共感によってもかたちづくられる。[…] 過去に生きた他者とのこうした一体化は、しばしば、現在におけるわたしたちのアイデン

15 Vgl. Ertl (2005), S. 3.

16 Vgl. Ertl (2005), S. 3.

ティティの再考あるいは再確認の基盤になる。¹⁷

一般的に小説や映画や漫画などの「一体化の歴史」を描くマスメディアは、「解釈の歴史」を描く歴史の研究書と比べて受け手に届く可能性は格段に高い。したがって、「一体化の歴史」を作り出すのはむしろメディアのほうであり、実際に「メディアの中の記憶・記録」が民衆の記憶を形勢していることが明らかになっている。¹⁸ さらにモーリス・スズキはこのことを前提に、小林よしのりの歴史漫画が「その歴史的事実についてのおびただしい数の誤り、脱落、歪曲を、たくさんの日本の歴史家や社会批評家にくりかえし指摘され、激しく批判された」ものの、「小林よしのりのテキストをアカデミックな論文や雑誌記事がことばで批判する場合、その主張がどんなに妥当であっても、漫画が読者に与えるインパクトを弱める効力はかなり限定的でしかない」¹⁹ ことに対して強い危機感を持っている。

モーリス・スズキが抱く不快感を伴う危機意識は、『ヒトラー—最期の12日間』（„Der Untergang“）が発表されたときのドイツ国内の評価を説明することに役立つだろう。„Film Spiegel“の批評は、この映画を次のようにこき下ろしている。

これまでのタブーを破って若い世代を巻き込んで議論を活発化させるといふ目的は少なくとも部分的には見せかけだけのものとなり、無知とお祭り騒ぎをしたいただけの華やかなキャストを示すに過ぎないものである。この映画がひとつだけ達成したことといえば、ヒトラーを主演に立てる後続の映画はさらに当惑と拒絶の反応を引き起こすことになる、ということだけである。その限りにおいて「このテーマのノーマル化」（アイヒンガー）という貢献を認めることが

17 モーリス・スズキ（2004年）、27-28ページ。

18 「十九世紀末から二〇世紀初頭のイギリスのかなりの層の人たちが、一七四五年のスコットランド蜂起を、ウォルター・スコットの“ウェイヴァリー小説”によって形成された物語どおりに理解していた。」モーリス・スズキ（2004年）、20ページ。

19 モーリス・スズキ（2004年）、226-227ページ。

できる。²⁰

この批評の中でトーマス・シュレーマー (Thomas Schlömer) は、映画の中に事実から逸脱した部分、つまり史実と異なる描写が見られることを指摘しているが、しかし批判の大部分はその点にはなく、むしろヒトラーの描き方を問題としているところが多い。つまり、「人間としてのヒトラー」を描き出すという試みは、結局ふだんのメディアにとめどなく流れているイメージ—ヒトラーは人間ではなく神話としての「悪」である—を覆すことはできなかった、というものである。すなわち、映画による影響を他のメディアのイメージを用いて牽制しようとするものであり、新しい「一体化の歴史」形成の危機を従来の「一体化の歴史」で封じようとするもの、と解釈できるだろう。

社会的背景のもう一つとしてあげられるのが、冷戦構造の崩壊である。これには少なくとも二つの意味が考えられるだろう。ひとつは両陣営に代表されるイデオロギーの崩壊により旧東側には民族意識や国民意識が芽生え始めたことであり、もうひとつは西側陣営における西洋社会的多(想起)文化 (die Multi (erinnerungs-) kulturalität westlicher Gesellschaften) が、脱植民地化と移民移動の結果増大したことである。²¹ このうち、特にドイツは壁の崩壊と東西ドイツの統一を経験しており、この両方の現象をドイツ国内に認めることができるだろう。前者が、旧東ドイツ市民の複雑な心境、後者がトルコ人問題などである。

旧東ドイツへの懐古的現象として「オスタルギー」(Ostalgie)²² が現れ始めたのは1993年ごろである。²³ インターネットの中にヴァーチャルな国家として旧東ドイツが存在する有様は、「統一ドイツの社会の中で自分の位置を探り出そうとする行為」²⁴ の現れであり、したがってア

20 http://www.filmspiegel.de/filme/untergangder/untergangder_1.php

21 Vgl. Erll (2005), S. 3.

22 オスタルギーとは、「統一後のドイツで、DDR時代の日常生活、および日常生活を伴っていたさまざまな『もの』への懐古的な愛着の意味」である。佐藤裕子 (2003年)、268ページ。

23 佐藤裕子 (2003年)、271ページ。

24 佐藤裕子 (2003年)、270ページ。

アイデンティティー構築の作業であるとみなすことができるだろう。このとき、人々はインターネットという虚構空間にアイデンティティーの源泉を求めることを問題としない。

しかし *Identität* の基盤となる国家像が歴史的事実に基づいたものであるか、虚構の産物であるかは、ここでは重要な問題であるとは思えない。なぜなら *Identität* を形成する重要な要素が *Heimat* であるならば、*Heimat* 自体が個人の主観の中に存在する感情世界であり、そこでは記憶の中で情報の選択が行われ、呼び起こされ、脚色されて再構築されるからである。²⁵

この指摘についても、モーリス・スズキの論を援用して解釈することが可能だろう。旧東ドイツについての集団的記憶が web 空間に再構築された「東ドイツ」をモデルに再構成されようとしているとするならば、まさしく「一体化としての歴史」の創出と現在におけるアイデンティティーの再考ということが出来る。そこで得られたアイデンティティーは冷戦体制化の当時にはなかったと言われており²⁶、その意味でこれは冷戦構造の崩壊を契機としてメディアによって作られた新しいアイデンティティーすなわち集団的記憶ということが出来るだろう。

次に、ドイツ国内における外国人問題について触れたい。ドイツ連邦統計庁 (*statistisches Bundesamt*)²⁷ によれば、2005年12月31日の時点でドイツの全人口における外国人の占める割合は8.8%である。ドイツ国内への移住者数は2004年が約60万人、2005年が約58万人と、やや減少傾向にあるが、しかし依然として外国人の国内移住者数が国外移住者数を上回っている。²⁸ 在ドイツ外国人の国籍を見てもトルコが3割近くを占

25 佐藤裕子 (2003年)、272ページ。

26 佐藤裕子 (2003年)、270-271ページ。

27 http://www.destatis.de/d_home.htm

28 2005年1月1日から新移民法 (*AufenthG*) が施行されているが、これは従来5種類あった滞在許可を2種類にまとめ、それぞれ期限付きと期限なしに振り分けるものである。この振り分けは外国人を選別的に受け入れることを明確にするものである、との批判もある。

めていることは特徴的であり、このような状況が今日のドイツにおけるトルコ人問題を生み出す背景となっている。

この問題について、2000年から2001年にかけて「基幹文化」(Leitkultur)という概念をめぐる論争があった。²⁹ CDUの議員が社会学者バッサム(Bassamu Tibi)のこの概念を引き合いに出して記者会見で発言し、その結果当時のシュレーダー首相をはじめとする中道右派、左派政党を巻き込んだ論争となった。このとき、元ツァイト紙編集長テオ・ゾンマー(Theo Sommer)は2000年11月16日付のツァイト紙に次のような論文を寄せている。すなわち「移民はいい、ゲットーはだめ」(„Einwanderung ja, Ghettos nein“)と題するもので、ドイツには基幹文化がすでにあること、すでに「先住民である」ドイツ人が住んでいることを前提に、「統合とは、必然的にかなりの程度ドイツ的基幹文化とその根本的価値への同化」であるとして、多文化主義に変わる概念として「多民族」(multiethnisch)と「ハイフン」(Bindestrich)という概念でドイツ人を規定することを唱えている。すなわち、「トルコドイツ人」(Turko-Deutsche)「ギリシャドイツ人」(Graceco-Deutsche)「イタリアドイツ人」(Italo-Deutsche)というものである。³⁰

以上、集团的記憶研究発達における社会的背景を分析・紹介してきた。まず、戦争の記憶をどう保存するかという問題について、モーリス・スズキによる二つの歴史概念を紹介しながら概観した。集团的記憶となる「一体化の歴史」が社会レベルにおいては学問的歴史調査を凌駕する時代である現代にとって、集团的記憶そのものが研究対象となるのは特別なことではない。同時に、複数個の集团的記憶がひとつの社会に存在する現代において、ひとつの社会をめぐる記憶と集団のアイデンティティーをめぐる記憶の「衝突」という現象が見られる。集团的記憶研究

29 三好範英(2006年)、33ページ以下。なお、本稿では取り上げられなかったが、旧東ドイツ問題や外国人問題について非常に興味深い報告が寄せられており、記憶問題をめぐる背景として参考にするべき議論が含まれている。たとえば、ドイツのモスクの中には故郷トルコと同じように唱詠を流すところが出てきたと報告している。基幹文化問題とともに、集团的記憶をめぐる問題としても大変興味深い。

30 Vgl. http://www.zeit.de/archiv/2000/47/200047_leitkultur.xml?page=all

は、こうした社会的背景を受けている。

2) 学際的背景

集団的記憶に関する論争はおそらくポストモダンの歴史哲学およびポスト構造主義の結果である。³¹「歴史の終焉」や「大きな物語の終焉」という思想が提案されているが、これを受けて、歴史は過ぎ去ったものの総和ではなく出来事についての知識であり、その意味で意識された出来事についてのみ語られるとされている。³²

歴史学は、17世紀の大学で「集合的単数の歴史」(Kollektivsingular-Geschichte)を作り出すために誕生した。この独立した学問分野は「普遍的な理論というコンセプトの元で」立ち上げられており、その意味で「個人や集団的想起と結びつくような記憶概念とは正反対のものである。」これは、17世紀以前の歴史記述が合理性を放棄したものであって、単なる「記憶の番人」としての機能以外持ち合わせていなかったことに起因する。しかし、20世紀にはそのような普遍的歴史観を疑問視する研究者が現れてきた。すなわち、フランシス・フクヤマ (Francis Fukuyama) らに代表される「大文字の歴史の終焉」であり、「多様な大文字の歴史」(Multiversalgeschichte)へと移行している。³³

一方、ドイツ国内に特有の学際的コンテクストも「記憶パラダイム」(Gedächtnis-Paradigma)を促進させている。それは、ドイツ国内における Geisteswissenschaft から Kulturwissenschaft への転回という学問的パラダイムの拡張である。³⁴これは、集団的記憶研究における方法論の発展という観点からも、研究機関としての発展という観点からも、非常に重要な転機となった。そこで、以下にハルトムート・ベーメ (Hartmut

31 Vgl. Erll (2005), S. 4.

32 Vgl. Pethes/Ruchatz (Hg.) (2001), S. 220.

33 Vgl. Pethes/Ruchatz (Hg.) (2001), S. 221.

34 Vgl. Erll (2005), S. 4. なお、Geisteswissenschaft および Kulturwissenschaft は、それぞれ「精神科学」および「文化科学」という訳語が適切であるように思われるが、しかし日本において定まった訳語がないことから、本稿においては原語のまま表記する。

Böhme) の論文「Kulturwissenschaftとは何か」 („Was ist Kulturwissenschaft?“)³⁵ を参考に、Kulturwissenschaftについて歴史と学問上の意義、集団的記憶研究とのかかわりについて述べることとする。

そもそも „Kulturwissenschaft“ という用語は、今日においては特に複数形と単数形によって、それぞれ指示される対象が異なっている。複数形で表される „Kulturwissenschaften“ は、哲学系学問領域をとりまとめたものであって、大学改革によって Geisteswissenschaft から名称変更したものが含まれる。これは、自然科学を含めて「すべての人間的営為と生活形態の総体としての文化」に取り組むもので、「世界の文化的形態」を説明するものである。³⁶ この広域にわたる学問は、文化的対象を一般的な意味での「実践」(Praktiken) とみなすことでドイツの伝統的な精神哲学から脱却することに成功した。³⁷ このことによって、従来の解釈に頼る方法論ではなく、構造的、機能的またはシステムのなどあらゆる方向からの方法論を確立した。このようなリフォーム化に伴う動きは、最終的に 1) 方法論的発達と単独学科への分化、2) 哲学系学問領域における学問プロセスの国際化とドイツ的伝統の終焉、3) 大学リフォームの促進、を推し進めることとなった。さらにリフォームについては、インターカルチャーとグローバル化やメディア技術の発達といった背景に、学問として挑戦する形で進められている。³⁸

一方、単数形の „Kulturwissenschaft“ は、個別の専門学科として設立されたものである。理論や方法論、問題設定などに特徴的で、単数とはいうものの内実は複数の学問領域を取り入れた構造となっており、その意

35 Hartmut Böhme: Was ist Kulturwissenschaft?

<http://www.culture.hu-berlin.de/lehre/langtexte/show.php?id=14&seite=1>

36 Vgl. Frühwald, Wolfgang / Jauß, Hans Robert / Koselleck, Reinhart / Mittelstraß, Jürgen / Steinwachs, Burkhard (1991) : *Geisteswissenschaften heute*. Frankfurt am Main. (Hartmut Böhme より引用)

37 ドイツ的精神哲学の伝統とは、文化対象を精神の客体化であると解釈し、精神発達のプロセスの中に位置づけようとする思想。歴史主義、実証主義の反動として19世紀後半に誕生して以来、今日までその枠組みが支配的である。(Böhme)

38 なお、Geisteswissenschaftという名称がすべてなくなったわけではない。詳しくは、柏木貴久子 (2006年)、133ページ以下注釈参照。

味で *Geisteswissenschaft* において学問的転回を迫る要因のひとつと考えられている。

特に1989年以降は旧東ドイツの関係諸機関と連携し、専門学科の設立を果たすなどの成果を上げている。たとえば、大学外部の研究所の設立、第三機関からの援助を受けての重点研究、高水準の理論的基盤の獲得を含む修士課程の設置にはじまり、社会人向けに様々なアレンジされたプログラム、副専攻の導入、文化マネジメントを目指す学生のための、専門課程の設立があげられる。

ほかの学問領域とは多くの面で明確に異なる *Kulturwissenschaft* は、今日では次のような特徴をあげることができる。ひとつは、*Kulturwissenschaft* の理論的基盤には他学科のものを取り入れていることであり、もうひとつは研究素材についても同様に *Kulturwissenschaft* に由来するものを取り扱っているわけではない、ということである。つまり両者に共通している点は、*Kulturwissenschaft* に近い研究領域や国際的な関連領域³⁹ との影響が非常に大きいという点である。⁴⁰

このようにして *Kulturwissenschaft* が1980年代から発達してきた。同時にこの時代は社会的背景で述べたように、過去をどのように記述するか、冷戦構造崩壊後の社会的イデオロギーの問題、民族意識の高揚といった事柄が問題視されており、その意味で *Kulturwissenschaft* にとって集団的記憶研究は学問的課題として取り上げられた。また、メディアの発達も重要な要素である。文字や絵にはじまりコンピューターへと至るメディアは「文化の継続化」(*Kontinuierung von Kultur*) という役目を担っており⁴¹、その意味でも *Kulturwissenschaft* に注目が集まったといえる。

こうしたことから、*Kulturwissenschaft* は「われわれの文化的遺産を管理する制度として機能しており」、またあらゆる学問分野にまたがるという性格から、方法論の多様性を指摘することができ、したがって「伝

39 ここでベーメがあげているのは、アナール学派、アングロアメリカ系のカルチュラル・スタディーズ、文化人類学、視覚身体学、新歴史主義、ポスト構造主義、脱構築主義、である。

40 Vgl. Hartmut Böhme. 邦訳は森貴史 (2005年) も参照。

41 Vgl. Erll (2003): In Nünning/Nünning (Hg.), S. 157.

承されているものを科学的に根拠付けられたやり方で取り扱うこと」⁴²という役割を期待されていた。結局二つの意味で社会的に Kulturwissenschaft は要請されたものだといえよう。ひとつは大学リフォームと現代化という要請であり、もうひとつは社会現象としての学問的課題である。

歴史学として「大きな歴史」の終焉を迎え、多様な集团的記憶と歴史記述のあり方が問われることとなった現代において、Kulturwissenschaft における多様な方法論の可能性は、記憶研究を促進させるのに十分であろう。「Kulturwissenschaft は次のような担当部署として扱われる。すなわち、科学的、政治的、民族的な想起の実践を理論的概念的な補足とともに映し出すことができ、様々な想起文化を比較し、[想起の実践に対して] アクチュアルな論争を批判的に伴わせることができるものである。」⁴³

3) メディア

そもそも「集团的記憶はメディアなしには考えられない」⁴⁴とされており、その意味で近年のメディアの発達を与える集团的記憶研究への影響は大きいと考えることができる。特にコンピューターおよびその周辺機器の発達とインターネットの拡大は興味深い。すでにテラバイト級のハードディスクが販売されており、個人がいつでも取り出せる情報の保存量は10年前とは比較にならないほど多い。またインターネットに関して、web上には全体を見渡すことは不可能なくらいの情報量が保存されているという見解に異論はないだろう。それらの情報を検索するシステムにも優れており、巨大なアーカイヴとして機能している。一方、そのような状況に対して「死んだ知識」(Totes Wissen) という評価もある。つまり「デジタル革命は私たちにメディアの保存の可能性と忘却の危険

42 Erll (2005). S. 4.

43 Erll (2005). S. 4.

44 Erll (2005), S. 123.

という矛盾した結果をもたらした」⁴⁵ というものである。

また、メディアによる過去の表象も集団的記憶研究を促進させている。すでに「社会的背景」で述べたとおり、過去の出来事に関するメディアが議論を呼んでいる。「ヒトラー—最期の12日間」以外でも、近年話題になった作品の中ではたとえば「グッバイ、レーニン」 („*Good bye! Lenin!*“) を過去の表象メディア作品としてあげることができるだろう。ここで問題となるのは、メディアは歴史的信憑性をどの程度示しているのか、どれくらい強く歴史像を規定するのかということである。⁴⁶

このように、集団的記憶研究においてメディアが占める割合は非常に大きい。社会的背景においてモーリス・スズキの論を紹介したが、彼女もメディアと記憶の関係を非常に重視している。メディアと集団的記憶の関係が重要である理由はいくつか考えられるが、そもそもこの問題はメディアの技術的発達、メディアの学問的重要性などが複雑にかかわってくる。その意味で、集団的記憶とメディアの関係性および集団的記憶研究とメディアの関係をすべて描き出すことは大変難しい作業である。したがって、ここではメディアの定義と特性、メディアと集団的記憶の関わりを概要を紹介するにとどめることとしたい。

まず、メディアとは何かをごく簡単に規定しておこう。目下メディア概念については様々なものがあって議論が割れているところであり、定義によってはカテゴリーに含まれるものと含まれないものが違う状況である。⁴⁷ ここではそのような混乱を回避するためにメディアとは何かを規定する。その際、集団的記憶研究にとって扱いやすい概念を用いることにしたい。

ジークフリート・シュミット (Siegfried J. Schmidt) は、メディアを「コンパクト概念」 (Kompaktbegriff) とすることを提唱し、以下の4つの構成要素を提示している。

1) コミュニケーションツール (Kommunikationsinstrumente)

45 Erl1 (2005), S. 3.

46 Vgl. Erl1 (2005), S. 4.

47 Vgl. Schmidt (2000), S. 93.

- 2) メディア技術 (Medientechnologie)
- 3) 社会システムの要素 (sozialsystemische Komponente)
- 4) メディアの提供 (Medienangebote)⁴⁸

「コミュニケーションツール」とは、記号論的に機能していて、かつ規則的で反復可能であるなどの条件を備える全てのマテリアル的に与えられたもの (alle materialen Gegebenheiten) である。つまりシニフィアンとシニフィエのペアをなしているもの全てが含まれ、具体的には自然的言語などが挙げられる。2番目の「メディア技術」には、書くことから印刷、放送、インターネットなどが挙げられる。これによって「4) メディアの提供」が行われる。3番目の「社会システムの要素」とは、学校や出版会社などを指している。これらはコミュニケーションツールを社会的に徹底させるとともに、メディアの提供を行う機関として機能する役目を負っている。最後の「メディアの提供」は、以上の3つの要素によって形作られるメディアの中身のことである。具体的な雑誌、番組、映画などが挙げられる。

メディアについて規定したところで、次にメディアの特質をあげることにはしたい。シュミットによれば、メディアはわれわれの認知およびコミュニケーションの可能性などを規定していると述べた上で、次のことに言及している。

メディアはわれわれの認知的、同様にコミュニケーション的可能性と機能を形作る。われわれが今日知っていることは、その大部分がメディアによって知っていることである。メディアは、われわれが何を想起し何を忘却するかを決定する。メディアは知の構造とその制御の連続化 (Sequenzierung) をコントロールする。⁴⁹

この言説は、ウォルター・J・オング (W. J. Ong) によって具体的に

48 Schmidt (2003): In Nünning/Nünning (Hg.), S. 354f. Vgl. auch: Siegfried J. Schmidt (2000), S. 94f.

49 Schmidt: In Fischer/Schmidt (Hg.) (2000), S. 83.

検証することができる。オングは自身の著書『声の文化と文字の文化』 („Orality and Literacy“) の中で、「ホメロス問題」を中心にこのテーマを取り扱っている。「オデュッセイア」などの作者として知られるホメロスは、文字を知らなかったといわれている。しかし、声の文化に特徴的な記憶術をもって、何千行にもわたる作品をよんでいたことが確認されている。その特徴的な記憶術というのは、ホメロスの時代にあっては「韻律にあうように作られた決まり文句」であった。そして、そのようにして作られた決まり文句が「古代ギリシャの叙事詩の構成を導いていた」のであり、韻律が固定されていることから「話のすじや叙事詩のトーンをそこなわずに、まったく簡単にいれかえることができた」と言われている。⁵⁰

こうしたことから、発展的に次のことが言えるだろう。すなわち、声の文化に生きる人々は、認識ならびに思考が、決まり文句的な組み立てに依存していたのである。覚えたことを忘れないようにするためには、常に反復している必要があっただろう。その際、「効果的にものごとを処理するためにも、固定し、型にしたがった思考パターンがどうしても欠かせ」なかったと考えられている。⁵¹ このように、言葉のリズムや決まり文句に依存した認識や思考というのが、声の文化に特徴的な認識や思考のあり方であると言える。

次に、文字の発明と文字の文化について説明したい。ギリシャ文字は、子音と母音を視覚的に表現することが可能である初めての文字であった。⁵² これによって、原理的には言語化可能である全てを視覚的に表記する能力を得たことになり、その効果として、コミュニケーション可能な領域が大幅に拡大された。声の文化においては、コミュニケーションが可能である領域は、「そこに居合わせること」(Anwesend) という限界があったが、文字が導入された文化においては、ある一定の条件において時空を超えてコミュニケーションが可能となった。

しかし、文字と書くことへの移行が必ずしも歓迎されたとはいえない

50 オング (1991年)、127ページ。

51 オング (1991年)、57ページ。

52 Vgl. Spangenberg: In Fohrmann/Müller (Hg.) (1995), S. 37.

い。たとえばプラトンは、『パイドロス』の中で次のように述べている。すなわち、1) 現実には人間の中にあるものを外部に取り出すという意味で、書くことは非人間的である。2) 書くことは、忘れっぽくなるので精神を弱め、記憶を破壊する。3) 書かれたテキストは呼び掛けに答えることがなく、対話ができない、などという理由による。いずれにしても、プラトンは文字の使用に対して非常に消極的な意見であったことがわかる。⁵³

しかし、プラトンは実際に「書いて」考えていたことを思い起こす必要があるだろう。彼の著作は対話形式であることが多いが、その話の組み立て方は明らかに声の文化のものとは違うことが証明されている。⁵⁴ここに、文字の文化がもたらしたもうひとつの大きな功績を認めることができる。すなわち、抽象的思考を可能にしたことである。まず、以前書かれたことに対するコメントなどの方法を通して、ロジックや時制がよりいっそう意識されるようになり、この意味でコミュニケーションそのものが法則的な構造を持つようになった。⁵⁵さらに、自分の思考も文字に変換可能であるから、結果として思考を自分から「切り離して」目に見える状態にすることを通して、自分自身や自分の思考を反省的に見つめなおす、ということに成功した。この思考の抽象化と切り離しこそが、ギリシャ哲学誕生の素地であるとされている。⁵⁶こうして、文字の文化は「正確さと厳密な分析」という感覚を作り出し、人間の思考そのものを変えていったのである。

このようにして、正確な記録が確立されていくことになった。さらに、アーカイヴという新しいシステムも開発され、これによって人間から情報を取り出して保管・管理することが可能となり、人間は膨大な蓄積的記憶の貯蔵庫を手に入れることに成功した。確かに、現在のようなアーカイヴが確立するのは印刷術の発明を待たなければならない。しかし、それも文字というメディアがあればこそその発明であることに異論は

53 オング (1991年)、168ページ。

54 オング (1991年)、217ページ。

55 Vgl. Spangenberg (1995): In Fohrmann/Müller (Hg.), S. 39.

56 Vgl. Spangenberg (1995): In Fohrmann/Müller (Hg.), S. 39.

ないだろう。その意味で声の文化から文字の文化への移行は、人間の技術メディア史のなかで一番の発明であったと言える。⁵⁷

文字が社会に導入された結果、記憶は精密さを獲得したと考えることができる。声の文化においては「正しさ」を証明する手立てが個人の記憶に限定されていたものが、文字の文化においては原理的には永久に記憶の正しさを証明することが可能となった。また、アーカイヴの出現により記憶を無限に蓄えることが可能となった。さらに、個人と社会が自己反省的に活動することができるようになり、社会の分化と複雑化を促進することになった。この分化と複雑化が、教育や政治や法律といった、個々の社会システムを生み出す契機となったのである。⁵⁸

ここまでは、認識がメディアに依存的であることを説明してきた。さてその一方で、メディアがわれわれの認識を規定するとし、あらゆる知識がメディアからもたらされるとすれば、次のことを言わなくてはならないだろう。すなわち、われわれの現実を構成しているのはメディアなのである。ここでは、特にマスメディアを中心に説明していきたい。

ニクラス・ルーマン (Niklas Luhmann) によれば、「マスメディアの現実」というときにそこには二つの意味が含まれている。ひとつは、作動するマスメディアシステムがあるという現実、もうひとつはマスメディアシステムの作動によって構成される「構成された現実」である。⁵⁹

57 オング (1991年)、178ページ。

58 Vgl. Spangenberg (1995): In Fohrmann/Müller (Hg.), S. 40.

59 システムは自己再生産的 (オートポイエーシス的) に作動している。自己再生産的とは、自分で自分の構成要素を作り出すことであり、たとえば細胞の活動が考えられる。(細胞分裂の際に、細胞は外部手段に頼ることなく行っている) また、システムはシステム内とシステム外 (環境と呼ばれる) を区別しながら作動し、また区別を作り続けている。システムはそのような作動を構成主義的になすものであり、したがってシステムにとって環境は常にシステムに相関的である。(環境をどのように観察するかによって、環境の「見え方」は変わってくる) さらに、そのような作動は停止することのないように制御されており、その作動が停止したときはシステムがもはや成立していないことを意味している。そのような性質を持つとされる社会システムのひとつであるマスメディアシステムは、環境の観察が作動であるとされている。(Luhmann (1996), S. 14f. u. a.. 構成主義については Schmidt (2000).) また、マスメディアの定義については「マスメディアは、複製技

[現実の現実と同時に] マスメディアの現実についての二つ目の意味として次のように言うことができる。つまり、マスメディアにとってもしくはマスメディアを通して[いる情報で]ほかの人にとって、現実と捉えられる現実である。⁶⁰

つまり、マスメディアシステムは基本的に「自分以外のもの」を観察し、放送ないし発行などすることがシステムの作動ということであるが、そのときに放送・発行された媒体の内容が、マスメディアによって構成された現実である。このとき、「自分以外のもの」が環境として現れてくることに注意する必要があるだろう。システムは自己言及（つまり「自分」を規定すること）と他者言及（「自分以外のもの」を規定すること）を通して環境をつくりだすことを考慮し、かつその際に「世界」というものは常にシステムに相関的な環境としてしか記述されえないとするならば、マスメディアシステムにとっても世界は常に相関的なものとしてのみ現れる。

したがって、マスメディアシステムは現実の「摸像」を映し出すことは不可能であり、常にマスメディアにとっての現実として記述するのである。

マスメディアは、現実を自分自身の観察視線から自分自身の区別の助けを借りて把握しようと努めるのである。マスメディアはマスメディアシステムに固有のシステム／環境の区別を、観察の様式および報告を行うこととして用いている。観察の結果としての「構成された現実」は、マスメディアによってその視聴者、読者および社会に、それを現実として受け入れてもらうように提供するのである。⁶¹

こうしてマスメディアは、社会に共通して保管される背景的知識を形

術によって大量生産が可能であり、かつ同時的な受け手と送り手の間にインターアクションが成立しない」としている。(Luhmann (1996), S. 10f.)

60 Luhmann(1996), S. 14.

61 Berghaus (2003), S. 182.

成することになる。

以上を踏まえた上で、集合的記憶とメディアの関係について確認していきたい。「集団的記憶はメディアなしには考えられない」といわれている理由として次の二つをあげることができるだろう。ひとつは、メディアはわれわれの認識に影響を与えることであり、もうひとつは個人と社会を結ぶ役割を果たすことである。

上で確認した定義によると、メディアは記号論的なコミュニケーションツールが含まれている。したがって、言語によるわれわれへの認識への影響を認めることができるだろう。これはオングの例で確認したことに準ずる。また、これらのメディアは知識やスキーマを流通させる役目を負っているといえる。学校における教育や新聞などのマスメディアの働きを思い起こしてみれば、このことは容易に想像できる。特にマスメディアは知識を社会に流通させることを目的としており、また社会的にすでに知られていることを前提に新しい知識を流通させている。⁶² このとき、メディアを通すことによって個人的な体験が社会の知識となることができる。これは、証言や証人が歴史学的にどの程度妥当性を得ることができるかという問題ではない。そうではなくて、端的に、個人の次元と社会的次元を媒介し、個人的な記憶から社会的な記憶へと変換する装置として働いていることを意味している。⁶³

こうしたことから、集団的記憶にとってメディアは必要不可欠であることがわかるだろう。その意味で、集団的記憶研究はメディア研究であるといわれている。⁶⁴ メディア技術の発達が集団的記憶に影響を与えているのと同時に、メディア研究の発達も集団的記憶研究に影響を与えているといえるだろう。

62 Vgl. Luhmann (1996)参照。

63 Vgl. Erll (2005), S.127. ただし、補足的に次のことを説明する必要があるだろう。すなわち、この場合の「社会」とはその大きさに無関係である。社会の最小単位と呼ばれることもある家族も社会であるし、学校などの組織なども社会である。また、それらの総体としての社会も考えることができるだろう。社会というときに問題となるのは、そこにコミュニケーションが成り立っているかどうかということだけ、ということができる。Berghaus (2003)も参照。

64 Vgl. Erll (2005), S.123.

以上、集団的記憶研究の背景について3つの視点から説明を加えてきた。ひとつめの社会的背景については、ドイツにおいてはナチスを体験した世代の減少、東西ドイツ統一に付随するアイデンティティーの問題と外国人という現象を挙げた。ふたつめの学際的背景として、「歴史」についての学問的あり方の変化に加えて、ドイツ国内における大学改革の影響を確認した。最後に、メディアについてメディア学の研究成果も紹介しながら集団的記憶研究とのかかわりについて紹介してきた。

いずれも集団的記憶研究にとって欠かせない学問的背景であるが、特にメディアの影響の大きさに注目して、ややスペースを多く使って説明した。モーリス・スズキが指摘するように、集団的記憶とその歴史形成にメディアが大きな影響を与えていることは間違いない。しかし、どのように影響を与えているのか、どうして影響を与えてしまうのか、という視点で集団的記憶とメディアの関係を考察した場合、非常に興味深い考察となるのではないだろうか。その意味で、あらゆるメディア研究およびメディア理論の成果を反映させた集団的記憶研究が期待されているといえる。

参考文献

- 岩崎稔 (1998年): 「ヤン・アスマンの《文化的記憶》1」、『未来』No. 382、未来社、18-24ページ。
- 太田信夫／多鹿秀継編著 (2000年): 『記憶研究の最前線』、北大路書房。
- 柏木貴久子 (2006年): 「Germanistikにおける文化研究と外国語教育への新たな視点」、『独逸文学』No. 50、関西大学独逸文学会、131-150ページ。
- 金児暁嗣／結城雅樹編 (2005年): 『文化行動の社会心理学』、北大路書房。
- 佐藤裕子 (2003年): 「Ossi-WitzとDDR-Witz: インターネットの中のHeimat」、『独逸文学』No. 47、関西大学独逸文学会、257-275ページ。
- テッサ・モーリス・スズキ (田代泰子訳) (2004年): 『過去は死なない: メディア・記憶・歴史』、岩波書店。
- = Morris - Suzuki, Tessa (2005): *The past within us : media, memory, history*. London: Verso.
- 森本敏己 (2006年): 「歴史研究における視覚表象と集合的記憶」、森本敏己編: 『視覚表象と集合的記憶: 歴史・現在・戦争』、旬報社、19-48ページ。
- ワルター・J・オング (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳) (1991年): 『声の文化と文

字の文化』、藤原書店。

= Ong, Walter Jackson (1982): *Orality and Literacy*. Methuen & Co. Ltd.

Assmann, Jan (1992=2005): *Das kulturelle Gedächtnis*. München: C. H. Beck.

Berghaus, Margot (2003): *Luhmann leicht gemacht*. Köln, Weimar, Wien: Böhlau (UTB).

Erl, Astrid (2003): Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen.: In Nünning, Ansgar und Vera Nünning (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften*. Stuttgart, Weimar: J. B. Metzler. S. 156-185.

Erl, Astrid (2005): *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*. Stuttgart, Weimar: Metzler.

Luhmann, Niklas (1996=2004): *Die Realität der Massenmedien*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaft.

Pethes, Nicolas und Jens Ruchatz (Hg.) (2001): *Gedächtnis und Erinnerung. Ein interdisziplinäres Lexikon*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag.

Schmidt, Siegfried J. (2000): *Kalte Faszination. Medien, Kultur, Wissenschaft in der Mediengesellschaft*. Weilerswist: Velbrück Wissenschaft.

Schmidt, Siegfried J. (2000): Medien- die alltäglichen Instrumente der Wirklichkeitskonstruktion.: In Fischer, Hans Rudi und Siegfried J. Schmidt (Hg.): *Wirklichkeit und Welterzeugung*. Heiderberg: Carl-Auer-Systeme Verlag. S. 77-84.

Schmidt, Siegfried J (2003): Medienkulturwissenschaft.: In Nünning, Ansgar und Vera Nünning (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften*. Stuttgart, Weimar: J. B. Metzler. S. 351-369.

Spangenberg, Peter M. (1995): Mediengeschichte- Medientheorie. : In Fohrmann, Jürgen und Harro Müller (Hg.): *Literaturwissenschaft*. München: Wilhelm Fink. S. 31-76.

Wittkamp, Robert F. (2005): Japanologie als Kulturwissenschaft: eine Verortung über den Kulturbegriff. : In *Die Deutsche Literatur*. Nr. 49.: Gesellschaft für Germanistik der Kansai Universität. S. 161-196.

Böhme, Hartmut: Was ist Kulturwissenschaft?

<http://www.culture.hu-berlin.de/lehre/langtexte/show.php?id=14&seite=1> (2006年12月20日アクセス)

= ハルトムート・ベーメ (森貴史訳) (2005年): 「ドイツ文化論とは何か?」、杉谷眞佐子、高田博行、浜崎桂子、森貴史編著:『ドイツ語が織りなす社会と文化』、関西大学出版部、151-180ページ。

Sommer, Theo: Einwanderung ja, Ghettos nein.

http://www.zeit.de/archiv/2000/47/200047_leitkultur.xml?page=all (12月15日アクセス)

DFG ホームページ

http://www.dfg.de/forschungsfoerderung/koordinierte_programme/sonderforschungs-

bereiche/liste/sfb_detail_434.html (2006年10月11日アクセス)

Film Spiegel ホームページ

http://www.film Spiegel.de/filme/untergangder/untergangder_1.php (2006年12月14日アクセス)

Statistisches Bundesamt ホームページ

http://www.destatis.de/d_home.htm (2006年12月14日アクセス)

Zum Hintergrund der Erforschung des kollektiven Gedächtnisses

Kōsuke SAITŌ

In den modernen Kulturwissenschaften stößt die Erforschung des kollektiven Gedächtnisses bereits seit einigen Jahren auf größtes Interesse. Die Gedächtnisforschung ist im Bereich der Psychologie stark entwickelt, ihr Forschungsbereich ist oft auf das individuelle Gedächtnis beschränkt. Andererseits gibt es auch in der Forschung zum kollektiven Gedächtnis wichtige Erkenntnisse. So ist bereits seit längerem klar, dass die individuelle Erinnerung von gesellschaftlichen oder äußeren Schemata abhängt. Nach Astrid Erll teile ich den Hintergrund der Entwicklung der Forschung zum kollektiven Gedächtnis in drei Komponenten und analysiere diese:

- 1) Gesellschaftlicher Hintergrund (ein starkes gesellschaftliches Interesse an historischen Filmen oder Romanen, die Erinnerung an den Zweiten Weltkrieg, das Ende des Kalten Krieges, und die daraus hervorgehenden Migrationsbewegung etc.).
- 2) Akademischer Hintergrund: Die aktuelle Diskussion über das kollektive Gedächtnis als Folge der postmodernen Geschichtsphilosophie oder des Poststrukturalismus sowie durch den Wandel zu den Kulturwissenschaften

(*cultural turn*); die „Kulturwissenschaft/-en fungieren“ dann als „Institutionen, die unser kulturelles Erbe verwalten“ (Astrid Erll).

3) Medien

Individuelles und kollektives Gedächtnis sind ohne Medien undenkbar, in diesem Sinne hat die Medienentwicklung Einfluss auf die Forschung zum kollektiven Gedächtnis. Medien konstituieren menschliche Kognitions- und Wahrnehmungsmuster sowie Kommunikationskompetenz. Wissen ist nur durch Medien möglich, und nach Niklas Luhmann erzeugen diese überhaupt erst die Realität der Gesellschaft. Medien fungieren weiterhin als Verbindungspunkte vom individuellen zum kollektiven Gedächtnis.